

## 石鎚山の縁起からみた 蔵王権現信仰

**はじめに** 近年、石鎚山信仰の拠点として著名な、愛媛県の横峰寺に関する報告書が刊行された（『四国八十八箇所霊場詳細調査報告書 第60番札所 横峰寺』愛媛県教育委員会、2011年）。そこに、横峰寺所蔵の「石土山縁起」の全文翻刻が掲載されたが、この史料は、蔵王権現信仰に関連して、石鎚山にとどまらず、金峯山や鳥取県の三徳山三佛寺についても興味深い史料と思われた。しかしそのままでは意味が取れない箇所も存在する。奈良文化財研究所では現在、三佛寺の文化財調査を実施しているので、関連して今回、横峰寺の「石土山縁起」の原本調査を実施した。その結果を報告したい。

**調査成果** 主要書誌事項は下記の通り。江戸時代中期写。卷子本。楮紙打紙。緑糸繡草花紋後補表紙、表紙見返は金銀箔散らし。八双・組紐あり。後補水晶軸。無界。訓点なし。1行16字。1紙16行前後。縦31.9cm、全長664.9cm、一紙長49.1cm。14紙。銅製筒入り。筒表書に「横峰寺縁起書一巻入」とある。

原本調査の結果、卷子本の貼継に錯簡があることが判明した。また原本には、祖本の古い字体を書写した際の誤写と考えるべき箇所が多く見受けられた。錯簡を正し、誤写は字形・意味から推測した結果、おおむね釈読が可能となった。その釈文を26・27頁に掲げておく。釈文には、第①紙・第②紙…ごとの先頭に、①・②…の番号を挿入した。釈文では貼継の錯簡を正して配列したので、第②紙の次に第⑦紙、第⑩紙の次に第③紙、第⑥紙の次に第⑪紙が続く。また釈読の私案として、誤写は、本来あったと想定した文字を、釈文の右傍に〔 〕〔 カ 〕に入れて示し、句読点・返点・「 」等を加えた。さらに便宜上、意味の上から全体をA～Nに区切り、それぞれに見出しをつけて、（ ）に入れてゴシックで示した。なお一部に傍線を引いてあるが、その点は後述する。

**年代** 本書は江戸時代の写本と思われるが、祖本の成立はさらに遡るだろう。この点、Hで、天河寺が野火で焼け、「今」は天河寺の観音堂がある、という記載が注目される。正確な年代を明らかにできないのが遺憾だが、天河寺は室町末期に衰えたとされており（『天河寺址』『愛媛県百科大事典』下巻、愛媛新聞社、1985年等）、祖本は中

世の成立と考えて差し支えなからう。石鎚山の縁起は本書以外には、宝暦10年（1760）成立の「石鉄山前神寺并里前神寺両寺記」（『四国辺路研究』第13号、1997年に翻刻あり）などが知られているが、それら近世の縁起よりも古い形を示す史料と言えよう。ちなみに上記の近世縁起には、天河寺は礎石のみが残ると記述する。

**三徳系縁起との比較** 本書はさまざまなエピソードで構成されており、荒唐無稽な観もある。しかし私が注目したいのは、「金峯山創草記」所引の「縁起」と、「金峯山雑記」所引の「三徳縁起」の逸文（『修験道章疏』第2巻・第3巻等所収）の内容が、本書の所々に見える点である。

「金峯山創草記」「金峯山雑記」は、成立は鎌倉時代後期以降だが、平安時代院政期の記録を豊富に含み、金峯山の歴史の基礎史料とされている。ならばそこに引用された「縁起」「三徳縁起」も、金峯山で重視された縁起のはずだが、内容が断片的にしか判明しない。その断片的内容を見るに、「縁起」と「三徳縁起」は両者共通する内容を持っているので、以下では両者の総称としては三徳系縁起と呼ぶことにする。

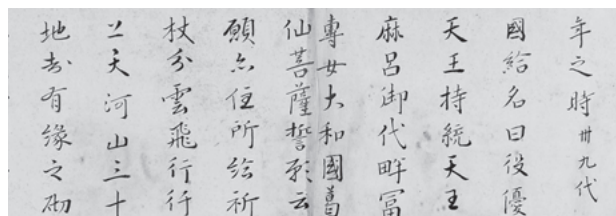
三徳系縁起の逸文は、26頁下段に掲出した。その際、「石土山縁起」と三徳系縁起とで語句が一致する場合、「縁起」は実線を、「三徳縁起」は波線を、三者が合致する語句には二重線を引いた。また「石土山縁起」のA・B等の内容区分を、三徳系縁起の対応箇所にもつけた。

三徳系縁起と「石土山縁起」を見較べると、大意は同じだが、細かい点では相違がある。例えばAは、三徳系縁起では石鎚山（石<sub>ト</sub>山）・金峯山（<sub>ニ</sub>金<sub>ト</sub>山）・三徳山（三<sub>ニ</sub>佛<sub>ト</sub>山）の三山を<sub>ニ</sub>千<sub>ト</sub>光<sub>ト</sub>佛<sub>ト</sub>浄<sub>ト</sub>土<sub>ト</sub>・<sub>ニ</sub>大<sub>ト</sub>光<sub>ト</sub>佛<sub>ト</sub>浄<sub>ト</sub>土<sub>ト</sub>・<sub>ニ</sub>無<sub>ト</sub>量<sub>ト</sub>光<sub>ト</sub>佛<sub>ト</sub>浄<sub>ト</sub>土<sub>ト</sub>と位置づけ、震旦<sub>ニ</sub>国<sub>ト</sub>の好積<sub>ト</sub>仙人<sub>ト</sub>が、三<sub>ニ</sub>茎<sub>ト</sub>の蓮<sub>ト</sub>花<sub>ト</sub>を散<sub>ト</sub>じて、それが三山に落ちたので、仙人は後に日本国に生まれ変わり、役優婆塞となったという。この点は「石土山縁起」では、石鎚山（石<sub>ト</sub>山）を<sub>ニ</sub>佛<sub>ト</sub>光<sub>ト</sub>浄<sub>ト</sub>土<sub>ト</sub>、金峯山（<sub>ニ</sub>金<sub>ト</sub>山）を<sub>ニ</sub>月<sub>ト</sub>光<sub>ト</sub>浄<sub>ト</sub>土<sub>ト</sub>とし、香積菩薩を<sub>ニ</sub>天<sub>ト</sub>竺<sub>ト</sub>の人<sub>ト</sub>としている。またNは、「縁起」は「若<sub>ニ</sub>国<sub>ト</sub>王<sub>ト</sub>傾<sub>ト</sub>我<sub>ト</sub>山<sub>ト</sub>時<sub>ト</sub>」、つまりもし国王が我が山を傾けるなら、とするが、「石土山縁起」では「若<sub>ニ</sub>余<sub>ト</sub>怨<sub>ト</sub>敵<sub>ト</sub>在<sub>ト</sub>我<sub>ト</sub>山<sub>ト</sub>傾<sub>ト</sub>」としている。以上のような点は、「石土山縁起」が、一般に分かりやすく受け入れられやすい表現に改変した結果と思われる。

一方、Nで「縁起」が勝手大明神のことを「靈鷲山辰巳護法。蔵王権現<sub>（檢非違儀）</sub>」とするのは、「石土山縁起」と

図45 第②紙・第③紙の紙継目

継目部分の料紙上部の写真。行間がずれ、明らかに錯簡とわかる。なお全体に、文字に誤字・不自然な字画が多く、古本を書写していることがうかがえる。



見較べれば、「靈鷲山辰巳護法。蔵王権現第一檢非違使」の誤写だと判明する。「石土山縁起」で三徳系縁起の誤写を正すことができるのである。ならば、Nで「石土山縁起」が同時に述べている、子守などの権現の記述も、基本的には三徳系縁起からの引用である可能性が高いだろう。「石土山縁起」は後世の改変もあるが、三徳系縁起の内容を伝えていると思われる。

さらに言えば、本書では三徳山のことを、LMで詳しく記述している。その内容は石鎚山とは無関係なので、後に付加したとは考えにくい。実際、近世の「石鉄山前神寺并里前神寺両寺記」には一切存在しない。LMは基本的に三徳系縁起の内容を伝えているのではなかろうか。

一方石鎚山と、そこで修行した石仙菩薩・光定などについて、C～JやOで詳細に述べている。これらは石鎚山の縁起としてふさわしく、内容的にも興味深い。ということは逆に、三徳系縁起にあった話かどうかは、よく検討する必要があるだろう。そのような目で見ると、石仙菩薩に関して、天竺から石南草を賜ったという空想的な話(F)の後に、桓武天皇(H)や光定・嵯峨天皇(J)の、平安時代実在の人物に即した話がある。その後は金峯山の話になり、より後代の事実のはずだが、天竺の靈鷲山の一部が大和国に崩落して金峯山となったという空想的な話が再び登場する(K)。このような構成は不自然の感があるが、これは、平安時代実在の人物に関する話は三徳系縁起に存在せず、別に付加されたものだと考えると、理解しやすくなるように思われる。

**金峯山の中世縁起との比較** また本書には、金峯山の他の中世縁起によく見られる話も存在する。特に、正嘉元年(1257)成立の「私聚百因縁集」巻8(『大日本仏教全書』所収)と類似性が高く、下記の部分はほぼ同書と共通する。Bの役行者の出生に関する部分(②「佛法渡扶桑經百余年」～⑦「從七歲婦三寶」)・金峯山で骸骨を見つけ、また、真言をおこなう部分(⑦「金峯山仙洞有旧骸骨」～⑧「行真言給故也」)、Dの熊野権現の部分(⑨「就中熊野大権現」～「庚寅年石多河南渡給次」)である。両書とも同じ本を参照して、文を取り込んでいるのだろう。ただしもちろん、「私聚百因縁集」には石鎚山・三徳山は一切登場しない。

では、「私聚百因縁集」と共通する上記の話は、三徳系縁起ですでに取り込んでいたのか。それとも、「石土山縁起」の編集の段階で取り入れたのか。判断は難しい

が、後者の可能性を考えたい。まず、Dの熊野権現の部分は、実は長寛2年(1164)頃成立の「長寛勘文」の抄出である。その際「石土山縁起」では、熊野と石鎚山が関係することを示す根拠として掲出されており、「私聚百因縁集」とは示し方が異なっている。この部分も、石鎚山について編集した際に付加された話のはずである。また、Bの金峯山で骸骨を見つける部分だが、場所を「金峯山」とする。しかし「石土山縁起」では「弥長山」という表現をよく使っており、全体としては、Kで、天竺の靈鷲山が崩落して「金峯山」ができた、という論理に見える。それ以前のBなどに「金峯山」とあるのは、話が混乱しているように見えるが、それは、三徳系縁起に他の説話も入れて再編成したためではなかろうか。

このように「石土山縁起」は、いくつかの系統の説話を取り込んで再編成していると思われる。ただし、「石土山縁起」の基本ストーリーは、香積菩薩の生まれ変わりが、三山で修行してそれぞれで蔵王権現をおこない出したという話である。その際、まず役優婆塞が三山で地主蔵王権現の所をおこない顕し(B)、さらに石仙菩薩・金剛手菩薩・智積菩薩がそれぞれ、石鎚山・金峯山・三徳山で金剛蔵王をおこない出した(EF・K・L)という形になっている。この話にどの程度の改変が加わっているのかは難しいが、大筋としては、三徳系縁起の内容としてふさわしい。本書の基本ストーリーは、三徳系縁起にさかのぼるのではなかろうか。

**結びにかえて** このように「石土山縁起」は、蔵王権現信仰の古縁起として、多様で興味深い内容を持っている。そのうち三徳系縁起については、次のように意義づけられないだろうか。蔵王権現の涌出説話が成立・伝播していく時期に、各地の靈山で、修験者が蔵王権現をおこない出したという説話が形成された。その際彼らは、役行者の生まれ変わりと位置づけられた。それを体系的にまとめ上げた結果、三徳系縁起の形になったと。

さらには「石土山縁起」では、三徳山で蔵王権現像を刻んでいる(L)。無量光佛浄土とされる三徳山で最後に像を刻むのが、三徳系縁起の話の落ちであるように見える。この像は三佛寺に現存する本尊のことだろうか。蔵王権現像・その信仰が展開していく中で、石鎚山・三佛寺とその尊像はどのような位置を占めるのだろうか。興味深い問題である。

(吉川 聡)



行人、<sup>(有力)</sup>道比丘等、流布顯密聖教、請三部密印、研一乘奧旨。(J)弟子之光定。石山大菩薩御弟子光定和尚者当国所生人也。母儀夢云、「腹中見生白蓮花。」覺後懷妊。当国十四郡雜使光定者此人也。一日之中走廻二七郡、各置一妻。互嫉妬成鬪諍之間、俄離俗納婦佛道。奇二七妻、登天河寺、奉值石山菩薩。出家得度、不改俗名、号光定。天河寺者為靈佛之道場、為靈仙之所居之間、女人不通靈地也。然都蘭之居不用之、登山之處、大地破裂。其跡于今在之。石山大菩薩御臨終之時、召光定和尚告、「我亦受人身、可利益衆生。汝可登比叡山也。」即御入滅。⑥間、錫杖松下奉納之。御廟于今在之。光定和尚登比叡山、為傳教大師御弟子。慈覺大師為天台座主之時、光定和尚与座主同時為延曆寺別當。仍号別當大師。弘仁之聖主、<sup>(巖)</sup>山門間食純糧、賜乞食袋於光定和尚。桓武天王第二王子。初言光定。光定和尚乍在于山門、承之即參内。皇子含咲有御物語。御即位後申嵯峨天皇是也。(K)金剛手菩薩。金峯山で蔵王を出す

可機御山故也。然三德山具三德。女人成佛所也。四天王女生此山。名曰佛光天女。此天女七歲時詣伯耆大山、生一人女子。長大名之都蘭尼。其母天女還三德山亦生四王天。此木如此女人所生也。仍女人詣登也矣。(N)蔵王権現とその山。眷属たち抑蔵王権現者、奉尋本地則靈山淨土釈迦如来。広守一都給。三十八所者無量寿如来。八大龍王者八大明王。子守者慈悲之鉢。靈鷲山未申護法。蔵王子。阿弥陀垂跡也。勝手者慕惡之相。弘四魔、破怨敵。靈鷲山辰巳護法。蔵王権現第一檢非違使。文殊垂迹也。我山佛法護持之軍兵十九萬騎也。蔵王大菩薩親近金剛童子三萬騎。三十八所三萬騎。子守三萬騎。勝手三萬騎。禪師三萬騎。聖宮三萬騎。劍帶一萬騎。如此等之眷属都合十九萬騎也。金剛童子行住坐臥護我山三宝。此則彼靈山淨土四維守護神来而顯金剛童子。初中後夜、廻每日院内、見顯住僧等善惡所行、令行賞罰給也。若于行学二道致勤功、摩頂守護。若作不善惡行者、忽加刑罰給。唯於一度二度者致制止。若至三度者忽捨給。爾時金剛童子行刑罰。八大龍王皆隱守護給。若余怨敵在我山傾、二萬金剛童子、併致合戰可防護。若傾我山者、不可有佛法名字。但暫雖違廢、經歲霜之後可繁昌。權現慈悲遍法界。雖無偏頗、加護參詣、救濟係念之輩給。是蔵王帰念者、寿福如温泉。運歩於我山者、三國心。生。大唐香積菩薩。日本役優婆塞。我山石泉菩薩。大峰金剛手菩薩。三德山是也。一眷属。八大金剛童子随行者、日夜恒時令給仕者也。(O)磯野比丘尼のその後。磯野比丘尼者大同三年子顯神明給。正三位当国第三靈社也。比丘尼。石山大菩薩依、為師檀、垂迹和光以来、為当山⑭之守護神。行者所乘之一鉢者、捨置于磯野之所、生葉。磯野楠木是也。石土山先達東三十六坊・西二十八坊有也。石土山縁起

「縁起」逸文(金峯山創草記)所引)縁起云、「(A)行者生天然。震旦・日域、登山、行於佛法靈驗。初天然生舍衛國、名毘經菩薩。次生震旦国、号好積仙人。于時向東方、以三莖黃蓮華、遙散、致觀念云、「我機縁深有可開佛法之所、当此華可落。」爾時三莖蓮華、一莖落伊与国石辻。千光佛淨土。一莖落大和国弥勒長。大光佛淨土。一莖落伯耆国三德山。無量光佛淨土。以知、三所機縁深處、佛法靈驗之勝地也。(B)後生大日本国、名曰役優婆塞。云云。又云、「(N)我山有佛法護持軍十九萬騎。常護我山佛法。衆僧。我初中後夜、廻院内、各見住僧所行善惡。給。若勤修学二道者、即摩頂加護。若行盜犯惡事者、忽擬宛罰。爾時子守知見以手招給、即止罰去。若一度二度制止、致三度者子守不可見給。爾時金剛童子刑罰給也。若国王傾我山時、二萬騎金剛童子顯立、合国王当行合戰。若我山軍陣被落者、不可有佛法之名号。若佛法有世、我山軍陣不可被落。若惡人惡王傾我山者、一七日乃至三七日見我在。無我山無魔界畏。何况人問界恣乎。故我山是從往昔以来不蒙宣旨之處也。但我山一千一百歲之時兵杖当起。一千一百五十歲之時亦兵杖可起。從此外全兵杖不可起」云云。勝手大明神縁起云、「(N)靈鷲山辰巳護法。蔵王権現。大聖文殊垂跡」云々。▽

山。於彼山、奉行出金剛蔵王大菩薩。歡喜無限。(L)智積菩薩、三佛山で蔵王を出す。爾於彼山、蒙蔵王示現云、「從此戊亥方可在三佛蓮花。」行者夢覺、含咲、誦大金刚輪陀羅尼一百返。從其詣三佛山。爾時名曰智積菩薩。三七日一息心經誦二万卷。初七日地藏菩薩出給。二七日弥陀三尊。三七日金剛蔵王自盤石涌出給畢。行者以石南草莖奉造蔵王狀、以涌出蔵王奉納之、安置釈迦之窟畢。三佛山釈迦・多宝・弥勒窟此則三佛也。(M)三德山と女人。弥長山・石土山女人不通之靈峯也。普通女人具煩惱行姪欲。初心行者

横峯寺

「三德縁起」逸文(金峯山雜記)所引)三德縁起云、「(A)有二淨土。名佛光淨土。但人間界号大日本国。中有三光佛淨土。一、千光佛淨土。伊与石辻。二、大光佛淨土。大和国弥勒長。三、無量光佛淨土。伯耆国三佛山。亦名三德山」云云。又云、「(K)靈鷲山辰巳角崩落大和国金山」云云。又云、「(K)彼山由繕那、厚一由繕那金地。故名金山。於彼山、金剛蔵王涌出。石佛在。行者奉禮靈鷲奉」云云。又云、「(K)彼山由繕那、厚一由繕那金地。故名金山。於彼山、金剛蔵王涌出。石佛在。行者奉禮靈鷲奉」云云。

横峯寺

横峯寺

横峯寺

石土山縁起

①石土山縁起

(A)香積菩薩が蓮華を投げる)昔中天竺摩訶陀国靈鷲山在大土。名曰香積菩薩。一七日長跪合掌、面向東方觀念。「何為我機縁、深弘通佛法、利益衆生乎。其時空中有聲。告曰、「從此東方有淨土。名曰佛光淨土。伊与国石土山也。二有淨土。名曰月光淨土。大和国弥長山也。三無量光淨土。伯耆国美徳山也。」爾時三葉蓮華從空降下。時大土取此蓮華、向東方發誓遙散云、「為我機縁、深可利益衆生界所当落此蓮華。」爾時一葉落伊与国石土山。一葉落大和国弥長山。一葉落伯耆国美徳山。知此三处是佛法之靈跡殊妙之勝也。依之、大土於三所之靈峯受生、修行給既七生也。香積菩薩石土山・金峯三徳修行始給事、我朝人王第一神武天王之御時也。蔵王権現居於三峯給事、同神武皇帝御宇也。

(B)役優婆塞が三山で修行)第三十代欽明天王御時、始奉渡佛経於我朝矣。佛法渡扶桑、經三百余年之時、卅九代天智天皇末受生於大和国給。名曰役優婆塞。奉逢天智天皇・文武天王・持統天皇・文武天皇四代帝。渡都岐麻呂御代、畔富賀茂間介麻呂・母同氏白専女。大和国葛上郡矢箱村生彼。所造當(牙)⑦第原寺是也。從胎内一在異相。生至七日、蓮花從空雨下。從七歳婦三宝。先詣石土山七年。次詣弥長山三年。次詣美徳山三年。難行苦行碎肝胆。其後婦弥長山、練行年久。金峯山仙洞有旧骸骨。支節相連不離。左手抱独古、右手取劍印臥。長九尺五寸。從眼中生枯柴木。行者見之欲取不被取。祈請佛天。本尊夢内、「此汝先生死骸也。汝石土山・当山・三徳山受生七生行者也。初二三生留骸骨。初生長七尺五寸。第二生八尺五寸。第三生九尺五寸。是則第三生骨也。欲知実否、誦千手陀羅尼五遍。般若心經三卷祈請、當取之。則如夢告。爾時即開兩手、亦開三重石室。行者初二三生造置所也。又行者自生歳七歳滿。慈救呪每日十万遍云。真言雖未我朝渡三世常住、⑧行真言給故也。先詣石土

山、一息誦心經一萬卷、奉行顯地主蔵王権現守。次弥長山・三徳山同奉行顯地主蔵王権現所也。(C)石鎚山の様子)抑当山為躰、諸山遠要件之峯、從麓登頂三日險路也。春之頃冬之間、人路絶、人不通。山高日近、早頂雪深氣寒、迫身躰故也。仍非春末秋初、不能參詣。樹林之巖石之上、皆聖衆所居、神冥寶窟也。伝云、「此山是三級塔婆形七宝所成之砌也。名一級二級三級所現在也。然者出山嶺、非如來三摩耶形也。禪定前神之間、自地中二十丈計、石塔生出。誠佛土転法輪砌云事、清淨地故也。女人不躄足。山頂在泉池。頭髮變生、白毛人。此水復本色。瘡病惱乱之輩、塗其身急平愈矣。(D)石鎚山と熊野権現の關係)当山大峰同神明垂跡之地、同行者修練之砌也。彼峯諸仙、始自北計大師役行者、三百八十人仙衆常住。就中熊野大権現、往昔甲寅歲、大唐王子信之旧跡、日域鎮西彦山天下給。其形八角水精石、高三尺六寸天下給。經五年、戊午年伊与国石土峯渡給。經六年、淡路国遊鶴羽峰渡給。次經六年、庚三月廿三日紀伊国無漏郡切目山西北海岸玉那本平測上松木本渡給。次過五十七年、三月廿七日熊野新宮南神蔵峯降給。次七十二年、新宮東阿須賀社石測谷。次過二十三年、本宮大湯原。經八箇年、庚寅年石多河南渡給。故当山与大峯同権現応跡之地、同行者練行砌也。(E)石仙菩薩、石土山で蔵王を出す)役行者受生則大和国。名曰石仙菩薩。亦猶詣伊予之国石土山、一十二年難行苦行、勇猛精進。一息誦般若心經一萬卷、經数月般若心經無數万卷誦、令現下可利益惡世衆生。身上祈請。⑩然釈迦如來光明赫奕現給。其時行者、非可利益惡世衆生御形、奉追返。次欲勒菩薩現。猶非可利益強難化惡世衆生御形、奉追返。其時金剛蔵王現慕惡忿怒相、令見行者給。其時行者奉拜見、可利益惡世衆生給御形、踊躍歡喜無極。(F)石南草を植える)爾時中天竺摩訶陀国有一山。名禁固徳山。其山頂有迦葉入定处。亦此山曰鷄足山。彼山有草。曰石南草。其山仙人有慈岳仙人。迦葉尊者起定、取此本一莖末三枝、告仙人云、「汝以此花可獻日本国石土山釈迦・弥勒・金剛蔵王三尊。」即仙人賜此花、來而奉供養三尊、禮拜恭敬去畢。行者即以此花中枝殖石土山并三徳山。畢此花始石土山出来故、以南南山一名石南草。亦此山頂、似開此花。故云石南山。以有上故、為石山云。(G)石仙菩薩の修行と磯野比丘尼)爰石仙菩薩誓願云、「此砌不能常住之栖。権現願亦住所給」祈請、以所持錫杖向東方。錫杖分雲飛行。行者行求錫杖禪定、黃鴨河上天河山三十八处岳下、懸五葉枝。仍此地知有縁之砌、練行坐禪。然此山空紫雲聳見。当州新居郡住人磯野比丘尼成奇特之思、差使遣彼山、無殊事。只異聖人坐給。來語此由、比丘尼發歸依之心、恭敬供養、常洗御衣進上之。(H)桓武天皇の病氣祈禱と天河寺建立)年月改反、星霜推移。開桓武聖主有御惱之事、諸卜占之輩占云、「伊予国南山有仙人。居彼令祈請。」云。官使爭宣旨下向于当国、行向聖人之所。依倫言雖申可恭洛之由、惣以不承諾。官使重申云、「聖人已住王地。何背宣旨哉。其時立金杖於地、登杖未坐。亦官使云、「立杖处豈非王地哉。此時行者、「汝言尤在其謂。早隨王宣可參洛。汝速可歸參。相計參着日④我可參會。」仍官使上洛之後經七七日、聖人当国津一杖為般、三衣為帆。其日申剋參着于王宮。海辺之人、路次之間、見人或成奇特之思、或加嘲哂之詞。件輩皆在過失。指ヲサス人乍指爪不能屈、吐詞族乍開口不得塞。因茲万人成恐怖、不言語。參着祈請之、不經程御惱平愈、王躰復本。仍勸賞可隨乞。其時行者全無所望。但致洗濯尼、為彼欲賜少分之田代。依之当国之内賜三百六十町田代、出磯野比丘尼。又令下時工匠之長、建立伽藍。本尊釈迦如來、左右脇士者普賢・文殊。今天河寺本尊是也。件草創之野火被燒失之刻、十一面觀音像件堂前三段計飛出立給。後人建立別堂奉安置之。今天河寺觀音堂是也。(I)山寺の様子)件石仙菩薩、内秘菩薩之徳、外示沙門之形。時人号曰石仙菩薩。山内在所、三所宝社、所謂橫峯・前神・禪定。五处宿院、坂中寺・吉祥寺・福城寺・香園寺・妙雲寺之住僧等也。此外下山之伽藍、有縁無縁